大正十二年九月一日

関東大震火災逢難記事

時に横浜市根岸町芝生二一五七番地に居住、

有名なる根岸競馬場下の海岸

鈴木達治

## 九月一日

朝來雨模様なり午前九時過ぎ例の如く出勤す。

昨 日は天長祭日なりしを以て、かねがね約あり東京に赴き松浦和平氏宅を訪ふ(松浦氏は東京

高等工業学校の前教授にて工学博士)。

赴きし時、 相携えて目白在長崎村快進社に行き、 自ら持ち帰りしビュイック社製造のものにて同氏使用後快進社へ売り、 自動車一台を購入す。 此の自動車は前年松浦氏米国に 全社にて之

を修繕したるものなり。

本日 又休暇中は大抵毎日午前中に出勤し、 は学校会計にその旨報告して購入手続きを速やかに完了せんが為め特に出勤 十一時頃校門を出て弁天橋際の銀行集会所に赴 した り。 きーニ

三人あり、 出で校内を一巡せんとして教務室に入る。 ゲームの玉突きをして、昼食を同所にてすることが例となり居りたり。 偶々山 . 本権兵衛内閣の將に成らんとする際なるを以て、談は政変に入り議論を上下 教務室には掛りの飯塚晶山、横地捨次郎、 由って十一時校長室を 武 田 某の

冬木君との交渉もほぼ終り、將に十二時にも近くなりたれば集会所へ行くべきであると考え

招聘を希望する旨を伝えらる。冬木君は卒業後神奈川県庁に奉職したる者なり。

す、其のうち本年度電気化学科卒業の冬木修三君來訪し、更に神奈川県庁にて化学出身者一名

の

つつある時に、彼の大震が突然と起った。

ただ室内は暗くなり又同時に書棚其他のものが 出してしまった。 室外に飛び出 何 か音がして校舎が震動すると思うと、 した。 余は獨り部屋に残ったが椅子に倚って居たか、 余は 「何に大丈夫だよ」と引きとめたが何ら顧慮せられず他 横地 倒れ騒々しい音がするのを覚えて居る許りであ 君は「ああ地震じゃ」と一声をあ 立って居たか全然 0 記憶 げ其 諸 氏 は も逃 ない、 まま

廊下 地 震 は益 に出で右折して渡り廊下の方へ歩んだ。 はいささかも周章狼狽の気味がなかった。此は思はぬ大震であると考えたのみであった。 々強くなり歩行もままならぬ気配をしたが、兎に角室外に脱出せんとして教務室より

る。

室内の暗くなったのは壁が落ちて土煙りが上がった為めであった。

もすることが出來ない様になった。 右に脱出すると高 渡り 廊 下に出るには其 い講堂があるから危險と考え、左へと志した時に第二震が猛烈に來り如 處に三四段の石段があるから踏み外さぬ 様に注意を要す、 又其 處 何と から

壊 の為め落命するにあらずや、人間というものは実に寸前暗黒のものであるかなという感 瞬 前まで政治を談じたり就職の交渉をしたりした自分は今此の天災に際会し或は校舎の倒 想が

然として脳底に浮び來った。

n を越えて便所と化学教室の間から更に広く又安全なる校庭に脱出することを得て、 其 時 偶々渡り廊下が右方に傾き來り、越えるには高過ぎた腰板が低くなりたる為め難なく其 安堵 で の 思

職 員 ,の既に脱出した連中は一群をなして居り、其内から横地君は「校長は出てきた」とて一

をなした

声を放ち余を取り巻き喜びくれた。

校庭の一方には老婦人である小使が蹣跚として全く狂気の如く南無妙法 他の多数の老若の小使連中が其後に付き一種凄楚慘憺たる場面を現出 道華経 し居 のお題目 を唱

自分 し居るも倒壊 の責任感より大震に伴う火災を想起し校舎の全部に注意し居りしに、 せしものなきも、 忽ち応 用化学科の建物より白烟の上るを認めしを以て、 何れ、 も大破 の状

鐵管 に防 1破損 火水 の為 ースを持出すを命じ水道の消火栓 め水道の用をなさぬことを知りたり。其内応用化学科の火の手が益 に連結し消火の動作に移らしめしに噴水の状ない 々上がり教室

道具なきを以て垣にしたる針金を外して廊下の柱を縛して之を倒さんとしたるも微 余儀なく之を放棄したり。 りたる講堂だけでも救わんとして渡り廊下の破壊を企てたり数人の職員と力を合せ他に ある各種 瓦斯のボンベが爆破して頻々として雷声をふるい光景慘憺たり、せめて我校の誇 衆又危険刻々なるを以て余を請じて校舎の近くより去らしめたり。 動だ、 たもせず 破壊 0

災は 茫然として校門に近き広場に立ち、 我校舎のみでなく或は全市に及び居るかと想像して一 無 量 の 儘、 初めて眼を遠く市中の方面に放てば濛々たる灰色の煙が天に漲るを見て、火 余が管理せる校舎の猛火の為め延焼しつつある状を見つ

段と悽然の感に打

たる。

暫くすると学校門前の民 屋より煙を上げ、 南風に煽られ電車道に沿って延焼しは じ めた り。

空気抜きより白煙を認むるに到り、 方応 用化学科の火は本 館に移り行き、本館 愈々我校舎の全滅を意識覚悟 の教務室の屋上を焼きつつある時に更に したり。

此 日 出 勤 の教授には藤村 ・柏木・飯塚の三教授と大山・小 林・ 中谷の三書記 其他 なり、 最早

う。 学校の防 長者であ は 学校の裏手の る林 火は 此の上致し方なき状勢なるを以て、各自自宅に帰るべきを命じたり。 正義氏 山を越え、 (教務課雇員)も居りしが神奈川の自宅に帰る為め途中困難をしたりとい 岡村 天神の方面 より帰宅せんと欲 į 山 麓 の一 農家に 猶校 入り渇を 中

眺望することを得、 オソート やする為め水を求 余が住所である根岸芝生の海岸が無事なるが如し、 を余に与えて其の水を飲ましめたり。 刑務所 む。 井 の大建物は盛んに燃えつつあり猶磯子方面と滝頭 水は 可 成 り混 濁 せり。 裏山を越え次の山 此家 に機械学科 稍安堵す。 に奉職 の 頂 きに至ると八 する一 八幡橋電車 方面 職 に 工 も火災を認 幡 あ の終点ま 橋 りてクレ 方 面 を

態実 津 田 其兩端に於て陥落し著しく斜傾し居るも通行には差し支えなし、橋を渡り、莫大小会社 時には其 で來ると道路に大なる亀裂を生じ、自動車がタイヤを没し其儘乗り捨てたるものあり八幡橋 波 0 に言 の 経営)をはじめ兩側の家屋多く倒れ居れり、芝生に入ると倒家割合に少し。芝生海 0 語に絶するものあり、 跡は更に認めざるも遙か南 煙が本牧沖を越えて遠く東京方面へ柵引きたり。 此れ 海軍貯藏の重油槽 方の横須賀市には黒煙天に冲し火焔又数十丈、其凄 の燃焼するものにて、 其後数日燃え続 岸には 愴 (左右 の状

幸に家は倒壊を免れ稍傾きたる程度にてありき。留守中の、喜美子老婆愛子及芳子の三人は庭 しならんと覚悟せしが、それは急卒の事とて考え違いにて門前に行き初めて我家を見るべきで 隣家 ١Ĭ١ 興一氏の邸の角を廻れば余が家が見えると思い急ぎ行けば家が見えず、必然倒壊せ

林にて遊び居り愛子は台所に居り直 分にして帰宅したのが二時四十分頃なりき。留守中の様子を聞くと喜美子はお友達と海岸 0 の下に走り出で頻に老婆を呼び衣服を持ちくれと叫びたりという。 「阿の傍に居り一同無事の顔を見合せて嬉しさ限りなかりき。学校をでたのが午後一時 に台所前の井戸側に走り出で、芳子は裸にて便所より庭 の 松

居り、其他の各室も同様なるも幸にして陶磁器の破損は殆どなし。屋外にては泉水の金 は 当に 南 方に傾き居り書斎の書棚は悉く倒れ室内に足を入るることも出來ぬ 状態を呈し 魚の大

半は池外に放出せられ、タタキ(三和土)が破れ既に一滴の水も湛えず金魚は悉く斃死せり。

に西瓜ありと云う。 留守の三人が既に昼食を終りたる後にて其日ごと残飯なし、何か食物なきやと云えば冷藏庫 依て恐る恐る室内に忍び入り西瓜と生卵を取り出し、 初めて昼食をなす。

其西瓜の冷えて美味なりしこと又一層なるを覚えたり。

又 八隣家 の飯 「島氏宅にては裏山が崩れて一家三人が家と共に埋もれたるも、 人夫が來り堀 り出

鮮 血 一に染まれつつ何處へか運び去られたりと。

災が延焼し來らば家を棄て三人共離れぬ様にして裏手の根岸競馬場の周囲の何れかに避難し居 暫 く休息したが芝生の此方面は無難ならんと思い、再び学校へ行きたり。萬一瀧 脱頭方面 の火

れと申し付けおきたり。

居れり。 午後 たる跡を望見して感慨無量なりき。 五 . 時家を出て元來りし道を辿り行けば、 時 '頃学校の裏 Ш に上れば水力実験室と仕上工場の二棟を除き、其他は悉く灰燼と化 刑務所は既に焼け盡くし其他の二ヶ所 も鎮 火し

南に 奏し以上の二棟を残し得たりと。取り出したる僅かの帳簿類を焼け残りの工場に納め、人も悉 校庭に入り其後の様子を聞けば、此日稍南方の風なりしを以て北方の応用化学科の火が .移り渡り廊下を延焼しつつ仕上工場に移る際バケツの僅かなる水を以て、 初めて防 火効を . 漸く

天の く帰 宿 蒔 の ざるを得ず、 本橋付近等見渡 ありて眺望に可なるを以て校庭に入り、試みに市中を瞰見す。 べきことも無ければ帰宅する事に決した。日既に暮れ山越しは惡路の為め物騒と考え実習学校 田 脇に沿ふて行く、庶務主任の小林長之助氏等其途中の梅林に焼出されて避難して居るに逢う。 | 雲色火に映じ四面声なく物凄き感をなしたり。学校の事も所謂萬事休すで此上は 一の脇を通りて英和女学校まで行きたり。寄宿舎は幸に大破なく見えたり。 の電車通まで行き見ると行く手は全部燃えつつあり、到底進み難きを以て引き返し高 り余獨り校庭のクローバーの草に腰を下せば、 昔のポンペイの最後も斯くありしならんと思は し得る限り全くの火の海と化し凄愴言語に絶す、 暮色蒼然として來り市中の空を眺めれば満 しめたり。 港より伊勢佐木町、 人力の微、 自然の 女学校は 偉に 野毛 何 等 打 山 山 上に 施す たれ 工 H

ぎ無 倒 れ 事 たる家 より堀 にて帰 0 の内に下りたるも付近又燃えつつあるを以て、なるべく火に遠き道をとり、 屋 |根瓦を踏み越えなどして漸く中村橋付近の堀割道に出て堀割川に沿い夜 八時過 時には

H 此 0 の 庭 慘禍 には 月は上り天に漲る黒煙灰煙の間より時々銅色の光を放ち殺気凄凉の気をただよわす。 既に避難者一家族ありたり。我等は庭の芝生の上に蚊帳を張り一同寝に就く、 に戰慄するものも無く至って呑気千萬なること殆ど平素と異ならず。 時に陰暦二十一 何れも

帰 等四人の外、 り來らず。 左右田銀行に奉職しているお芳の弟隆、 愛子の甥寿吉 (都南銀行出勤)

#### \_

橋辺を徘徊して逢ふ知人に就き色々な消息等を応答質問して行くも一切不明なり。 兩人の消息と左右田棟一の様子を知るべく朝五時四十分頃家を出で根岸付近より中村橋千歳

えて海岸 言に失望し兩人共進退に迷ひしが兎に角一度は其跡を見んとして勇を鼓して、 に行き夜を明かし、 幸に尋ね たれば大いに安堵す。 依 って一旦午前十一時頃帰宅すれば隆及び寿吉の兩人は午前九時頃帰宅したりとて家に居り 一帯の無事を見、驚喜して家に入りたりという。 し隆に出会し兩人にて神奈川の海岸にて船に避難したるも危険に就き更に高嶋 直に根岸の宅に帰らんとせしが根岸一 寿吉は伊勢佐木町辺の都南銀行より出で横浜駅付近の左右田 帯は津波に襲はれ跡方もないとの流 根岸競馬場を越 一銀行に行き 埋 立

出 震 文部大臣と神奈川県知事へ二通の書を認めた。 は猶頻々として恐るべきものあるを以て戰々として屋内に入り見当り次第の紙筆を取

九月一日小官出勤執務中、正午少し前突然激震に逢う。小官脱出に稍機を失し辛うじて

直に消火栓を開き消火に従事せしめんとするも鐵管に一滴の水なし。更に廊下破壊工事に着手 逃れ校庭に出づ。震始後僅か数分にして既に電気化学科及び応用化学科実験室より火気を認む。 せしも人手なく効を奏せず機械工学科工場一棟・水力実験室一棟・職工控室一棟。写眞印 棟 (県立)。応用化学特別工場(小建築)一棟を残し他は全部焼失せし事、 実に遺憾千万な 刷

ず己むなく焼失に委したり。 既に扉を損じ閉鎖不能に陥 猶 重 要書類を藏する会計課保管の金庫は執務中開扉せしものを閉鎖せんとせしも激震 れ り。 此が為め内容幾分持ち出したるも危険にして屋内作業を許さ の為め り。

り帰宅の途を失したる程にて火災四方に起り交通殆ど杜絶したる為めなり。 したるものあり、 今回の震災は当市殆ど全部を赤土と化し、本校職員中住居を失ひし者多く又多少の負傷をな 当日出勤者外の職員に就いては未だ一人だに消息を詳かにせず、 小官夜に入

謹んで報告す

横浜高等工業学校長

鈴木達治

文部大臣 鎌田栄吉殿大正十二年九月二日

碇泊 猶 通 は県知事安河内麻吉氏宛にて未曾有の大惨事に際し不逞の徒が横行するものあらば港内 汽船を召発して之に監禁収容すべしとの意見書なり。 混乱の際其文を記憶又保存なし

多分神奈川県庁に残り居るならん。

文部 安河 内 御 知事 届 は けを願 多分紅葉坂官舎の付近に居るべし、 いたいと依 頼せよとて隆を遺はす。 必ず知事に面会して県庁の便を以て一 通は

午後四時頃思いがけなく突然棟一宅に來る。

救 壊し家族三人が其下敷となり津波は其処まで來り危険至極に迫りしも幸にさしたる負傷 を割り祝す。 何ならんと多大の不安の處なりしを以て其無事の顔を見て全く安堵の思いをなし栽培のメ 左 出されたり。 田 の 住 棟一は八月三十日に家族の避暑地なる鵠沼海岸の別邸に赴き居りたり。 |宅宮崎町並に本家 本人は本日鵠沼海岸より徒歩にて横浜に帰りたるなり。 の住宅月岡町辺も全く赤土になりたることなれば棟 留守宅には二人の女 別 家も如 邸 もなく は倒 ロン

なる温 本 今夜より朝鮮人が放火するとか強盗殺人するとかの流言頻にして物騒千万である。 室 に至り宅に避難して庭に野宿する者十二人となる。 に 避 難者は 何れ も知らぬ他人のみにて其等は大きな方の温室に又野天に寝 家族は庭のあづまやに隆 ・寿吉は小 我家は平

中

ற்

みなりと。

素夜 を受けたり。 中 と雖 も、 右 就寝前でなければ門の戸を閉さぬ習慣なるに隣人之を危み門戸を鎖ざす様注意 の次第にて青年会の 面 々並びに在郷軍人連が総出にて要所々々を警戒す。

我家よりも隆及寿吉の兩人が交代にて之に参加す。

此 日 天気晴朗なりしも各所の火災より起る烟煙濛々として天に漲り恰も天猶明けず猶暁天

1

時

の

如

三日

も共 工 当なる農家あり、 心 き見んとて焼け跡の蒔田町まで行くと、大山春翠 猶二斗の米ありという。 より食 仮 細 前 事 に加籐農家に赴き、 き次第であると考え、早朝寿吉を連れて米の工夫に出掛ける。学校の先きに 日 事を供 一芳子の 務所にした高工裏の飯塚教授の宅に赴く。 話 したり。 に 兩三人づつ学生を寄宿せしむる家にて余も知り居る間柄なれば先ず此家 避難者中 芳子に宅に幾何の米ありやと聞けば、 二斗あらば我家族には当分心配なしとするも避難者に食せしむるには 此処にて玄米二斗を余は貰ひ受け寿吉と共に帰る。 <u>。</u> 家族三人者に食物の携帯なく欠食 余が米の話に共鳴し此処で相談一 ・小林長之助の兩書記に出合す、 兩日前米を取 の事あり芳子の注意にて当方 程なく電化三年生 りし侭なるを以 加 決飯 相携 籐とい 塚教授 て高 う相 に行

児玉 毅甫という学生に逢い寿吉を助けて携帯す。途中二度夕立に逢ひ雨宿りしつつ帰宅す。

此にて米四斗となり当分避難者に食を頒つことが出來ると一安心す。

宅す。 本 日 聞けばはじめ伊勢山に避難せしも危かりし為め更に茂木の別邸庭に逃れ其処に二泊した 午頃兼て行方不明なりとて心配せし宮崎町の女中二人見すぼらしき風にて泣く泣く來

りと、此處は大正九年財界変動ありし際没落したる茂木氏が毎年菊の花壇を設け、客を会した

る庭にて今回の災難に幾千の人命が救はれたのであった。

に産婆の女学生あり、 産気と知り芳子は産湯の世話をでもせんとて、かれこれと立働き中、 知らず、主人の方は当日学校にて圧死し、細君は今夕産気を催し呻吟の声殆ど聞くに堪えず、 猶宅の庭を隔てたる處に夫婦者あり、共に小学校教師たり、別に懇意でもなければ其姓名を 幸ひと早速に赴き応急の手当をなしたり。 はからずも宅に避難者中

も見えず。 今夕猶市の火災の或場所は天を焦し、 横須賀重油の燃焼盛んにして何時になったら消えると

悲惨なる話を聞くこと多し四日 足を痛めたる為め外出せず

棟 会所へ行くとて銀行を出るや、直に炎に遇いたるものにて其の何処で横死せしか終に判明せず。 來にて終に焼死す。 左右 の 縁故にて銀行に勤め居たり。 田 銀 行の本店は南仲通りにあり支配人合田晋氏は余と同郷の三島の産にて高商を卒業し 同支配人にて余と同志社同窓たる鈴木左馬次郎氏あり、 震災の瞬間、 自席にて器物等に圧せられ脱出を得ず火 昼飯 の 為め銀 行 0 集 襲

松ケ枝町支店にては支店長重役左右田誠一氏死す。

夫婦 て再び入り四人共 棟 の外次男夫婦も家に居たり。 一の岳父左右田金作氏の兄左右 圧 死せ しものと推せらるるという。 次男夫婦 田 清三 は地 郎氏は福富 震 の時 町 に住して薬店を開業せり。 家を出でしも親夫婦を救ひ出さん 清三 郎 氏老

此上なし。 れ t 宮崎 焼失す。 町 の 棟 市内左右田 宅、 月岡 町 銀行本支店たしか七ヶ所ありしが全部焼失す。 左右 国国1 郎氏本宅、 猶棟 妻静子さんの妹婿南官市氏の本 左右田一家 0 不幸 -牧宅何 損 害

又横浜 、地方裁判所長、検事正、航路標識所長の三勅任長官震死し、 其役所も又焼失す。又正

金銀行の周囲にも無数の焼死者累々たりと。

五日 快晴

程、依然として何等の損害を見ず。 を免れたるも著しく破損状態にあり、 支店 を禁止せ 氏を訪ふ。 朝 『七時頃家を出づ、先ず本牧市電終点付近に住する左右田銀行支配人松崎氏の宅を訪ひ、 長会議を同氏の宅にて開くとの棟一よりの伝言を致したり。其より三渓園に至り原富 り。 三渓 遠 内に入りしに広き道路は亀裂して大海 園 は原氏の邸宅なるも市の公園として常に公開せしが、 女婿西郷健雄氏家族と共に庭内にて天幕中にあ 本邸 の隣なる桃 山御殿と山上の三重塔は全く不思 の大浪の状を呈せり、 門前に柵を設けて公開 茅葺の本邸 り。 原 議 は 銀行 氏 なる 倒 太 は 壊 郎

の .向ひ殆ど全部を焼き盡くし居たり。津田氏余を送って桜道トンネルまで來る 跡あるも津田 原 氏邸を辞し本牧市電終点をへて小湊に至り教授津田幹夫氏を訪ふ。小湊辺より所々 氏邸は無事なり。 其付近の教授安川数太郎氏を訪ふ。安川氏宅を境として市 に 火災 中

生死不明なりと噂ありしが当時箱根

の別邸にあり、昨四日無事帰宅したりとて面

一会す。

焼 (け残り家もなく一面茫々として全くの赤土に化し、 実に形 ネル 容に苦しむ。 は 破 損 なきを以て通行して元町 に出づ。前方を瞰視すれば一本の立木もなく一 死屍より來る異臭紛々として鼻をつき惨 軒の

づれば船は悉く焼け沈み或は半ば沈み、船中又其付近には死屍の浮び居るもの無数なり。 其 より元 町 0 電 車 鐵 橋 (極度に曲がりたる) を四つ這ひになって渡り、 吉浜 橋 の 堀 Ш 筋 屍は に

出

挟まれ其より脱出すること能はず其侭火烟の為め焦死したるを見たり、 何 もふくれ居り其何人であるかは漸く識別し得る程度なり。 河岸の道 路の地割れ 惨たる状見るに忍びず。 に其 兩脚

多 諸 数が 建築 たことが実に不思議に思う程なり。 其より公園市役所左右田銀行本店記念会館県庁等の焼跡を見て本町通りに出づ。 此 何 建築中に逃げ込みしが、 れも皆焼け落ちたり。 中にも宏大なる正金銀 火は内部に入り殆ど全部が焼死. 行は全部花崗岩なりしを以て、 したり。 此の如き建築が 此 避 目 難 抜 焼失 者 き 0

り其 あらんと戰慄する許りなり。 丈内外 正 金 数算なし。 門前 の 石 の 垣 石 一あり此石垣と建築との間は石疊の広場なり、此広場に相累積して黒焦 段の上のみにても二十幾人の焦死体が横たはり居たり。 如何にして能く脱出し能はざりしか此も不思議に思はる。実に地獄とは斯くも 正金の建築を囲んで約 の 死 体あ

此 き、今二三十分も地震が遅ければ余等も既に此の煉瓦家屋の屋上にありし筈にて余等は 会所は夏休中毎日余の昼食をとりし処にて当日も友人近藤賢二氏と約し同所にて会合の筈な ·給仕連の二階にありしもの一人も免れ得ざりしという。 【家屋と運命を共にしたること殆ど疑なし。 更に銀 行集会所を見ると同所は可なり深く地中に埋没しながら全部破壊焼失したり。 又多数の横浜の名士も同様なりしならん。 集会所 銀行 正 しく n

の

役所 紅 は其處に避難し居れり、此處に立ち寄り知事と市 葉坂付近は移民取扱の建築物と猶其他 に一軒の破 長に面会し、 壊及び焼失を免れたるものあり県庁と市 特に此の非常の災厄に面

市民の元気を鼓舞し繁栄再興に就き語り合いたり。

至る処同じ特に此処にて小児の死屍を見て特に哀れを感ず。 其より引返し大江橋を渡り馬車道より伊勢佐木町に出づ。 堀割り川の船中に死屍のある事、

市 歓 楽境 なりし伊勢佐木町は今や全く赤土に化し、今日の炎天一滴の水さへ求むるに道な

く今昔の感低徊去るに忍びず。

れ 來り、其が為め魚介の死滅せることを認む。 夕方家に帰る、 根岸の海岸まで來ると横須賀 の黒烟猶依然として衰へず旦重油は海岸まで流

## 六日 晴天

訪 夫人の実子にして田 問 午 前 中 メロン一箇を携え行く、 外出せ ず。 午後中村橋付近の左右田銀行倉庫の一部に避難して居る左右田老未亡人を 島家に行きしなり。 同所より田島六郎氏夫婦と同道して夕方帰宅す。六郎氏は老 仝じく根岸海岸に住す。

今夕初めて家に入って眠る。傾きたる家には支柱を為したり、 夜中時々微震あり充分に安眠

### 七日

前 後 朝 なるであらうかと嘆息しつつ歩んで居るのを見た。 の夫婦者らしきもの若干の荷物を背と手に提げ野原を見渡しながら、 :七時四十分頃家を出で八幡橋より桜木町に向う。 全くの焼野原を行く、 何處かを目当てに住み馴れた此地を去り 此 日本橋 が果して元 付近に五十 の 横 浜

行くものと見えた。

余に一

種の感慨を與えた。

配 持ち行く者、 製粉会社から製粉を取り出し一袋を携え行く者、 給 桜 木 の米穀等を貰い受け車力にて運搬する団体も相当に相交はり往來織るが如くである。 より横 顔も手も衣服も麦粉で白くして居る様は全く餓鬼の世の中であると思はしむ。 浜駅間 は可なり人通りが繁し更に神奈川方面へ行くと往來混雑する程である。 或は重さに堪えぬ為め袋を破り内容を減して 猶

は たるもので、大正九年以後は中村氏の代りに原富太郎氏が経営せしものである。 横浜 舎也 時頃研究所に達し主任冨山保氏及其他の所員に面会し一同無事を喜び且つ祝す。 余は所長を嘱託せられ冨山保氏は主任として明治専門学校教授より其当時転任し來り 密研究所と称し、 大正五年中村房次郎氏によって建設せられ、化学工業を研究する処 研究所

研 究 所 の火災を免れたるには 其処に一つの 僥 倖 が あ った。

成り八月三十一日に研究所の一部を十二天に移す為め其屋根を取壊したり。 0 其取壊 安の浦 を感ぜられ、成るべく頻々と研究所に出入りして其研究の様子を見たいと考えられ 力を盡くし 研 究 しに着手したる家屋に移りたるも屋根なき為め火勢急に発展せず、其隙に乗じ所 所 島町では遠隔であるからとて、 実験 時 原氏の出資に依 用の水などを使用して漸く之を消し止めたり。 って経営せ 原氏の邸宅に近い本牧十二天に移転せしめんとて其 しものなりしが、 原氏 此事なくば研究所 は漸 次に研 然るに震災 究所 0 の火 成 績 は 員 の 併 更に 火は 必死 計 興 子

は の女児と並び其傍に 所にて商業会議所会 海道街道を市中に帰 特に哀れなりき。 其 処を出て大江 本カーボン株式会社の技師長友人石川等氏を其避難 |橋と吉田橋との間なる水面の災死者を見る。其河岸に白髪の老婆が十二三歳 猶其付近の水面に十四五歳の女子が赤き帯をしめ衣服のまま浮かび居たり。 一婦 |頭井坂孝氏、サムライ商会野村洋三氏、憲政会の頭首戸井嘉作氏等に会う。 り仮県庁に安河内麻吉知事を、 人が 数 歳 の 幼児を抱き又其傍に父の如き男子が 仮市役所に渡辺勝三郎市 所に見舞ひ、 水に臨みて死し居る様 長 再び を訪 問 神 奈 Ш 市 の 東

北

に延び子安

一帯を烏有に帰したること疑いなき処なり。子安一帯の火災を免れたるは実に研

究所員

0

功労なりと云はざるを得ず。

れより日

震災の死者は殆ど凡てが眼に入る処にては焼死者にて衣服が焼け裸になり熱火の為 め黒

張して居るので、 稀に着衣の死者を見ると又一種の惨悲を感ぜらる。

日 本 橋を経て弘明寺の 高工に着せしは午後三時なりき。 高工の裏にある飯 塚教授 の宅にて当

日 後より職員会議を開き居りしを以て之に列席し相互救 助の方法等を協議 した

き有様で全く金銭不用の昨今の状態である。 0 達であっ 中文部 た。 省より小使來る。 有難き事には相違なきも金銭を所持しても買はんと欲する物品を売る店がな 会計課長よりの來書あり書中の意は八日より九月分の俸給支拂

此 の如き状態なれば外出しても乗り物はなく又飲食する処もなし、故に外出には必ず握り飯

梅干入) を携 へ又水筒の用意も必要であった。

安川

教授及桜

:井助教授と同伴して山を越え夕方帰宅す。

此 Ш 日 隈 :留守中午後三時頃山隈芳枝氏東京代々木山谷より震災見舞に來りたり、亡妻イヨ子の従弟 十郎氏の妻にして十郎氏は七年前に死し未亡人なり。山隈未亡人は横浜は地震 と津 波と火

災にて全滅したりと伝え聞き安閑として居るに忍びずとて、此日朝六時 食を携帯して横浜まで徒歩の覚悟にて來りしが、此日初めて新宿より子安まで貨物 |通を知り非常な混雑と困苦を冒して子安に着し其より三里徒歩にて全市焦土と死屍の間 に家を出て二日 列 車 な 分 を縫 がら の

開

顔 を合わ 歩き根岸に達し此海岸一帯が住家と樹木の依然として存在せるに却って驚き又一同と無事 せ非常に喜ばれたり。 女の身で此非常時の冒険旅行は並大抵で出來ない事で実に感激

当夜地震五六度あり一同安眠に苦しむ。

に堪えな

い事

すであっ

た。

#### 八日

時品川 午前 八時 を発し夜半仮県庁まで來り、 頃文部省属官川原與作。 其処で一泊し県吏の案内にて來邸したのであっ 四方田三四郎の兩氏根岸の宅に來る。兩氏は昨七日午後四

のである。 横 浜 高 エの 先きに知事を経て呈出したる震災報告書はまだ本省に達せぬ 消息が詳かならず、 特に校長の身上が気遣はれたる為め、 慰問使となって來 ものと見えたり。 った

校を辞し帰京の途に就く、 余は兩氏を久保山まで送って相別る。

《を饗し十時頃相携へて焼け跡の学校視察を終り職員 |

同の安否をも知り午後一時

兩

飯

と聞 避難しつつある中村房次郎氏を慰問す。 是より一本松の長興氏邸 きたる増 田 増 藏氏を訪 れ、 (長興氏は茂木氏経営の七十七銀行の専務たりし人) 其より水道貯水池の下にあるテニスコートに小屋を作り其処に に避難し居る

中 村 氏 は 大 正 九 年 . م 財 界恐慌 時代 に増田 屋と共に倒産 爾來市の表面より隠退し居たり。

は 大 正 二年 以 來特 に 懇 親 の 間 柄 な りし

今から裸 余は大に 此 時 共鳴して別る。 村 貫で出でて働き市 氏 は 天幕 様の 小 屋 Ö から出て來り、 復興の為め全力を盡さん」と語られ意気昂然たるものが 「今や我横浜は全滅して誰も裸になった、 あ 我れ

水を長 其 より坂を上り貯水池を見る。コンクリートは全部亀裂して貯水は枯れ底に僅かに残れ 綱 の 釣 瓶にて水を汲み取り居る人々あり、又濾過池の方では人々行水をしつつあ る溜

り。 其等を十人位づつ一處に集め焼残りの材木にて上からトタン板を以て覆ひ火葬 せられて脱 広場には二百四五十人の死屍あり。 なるが焼瓦の外何一物もなく、不動尊の絶壁も崩れ落ち何処が何処やら方角も立ち兼ね茫然 老 再び野毛坂を下り脇道に入ると其処にも此処にも死屍が横はり居れり。特に 松 から野毛坂を下り更に坂を上りて宮崎町に至る。宮崎町三六は棟一の住宅のありし処 出の途なく焦死したるものなるべし。 此処は広場である為めに安全なりと其処に集まり火に包囲 最早一週間を経たることなれば臭気甚だし。 に付しつつあり、 初音町に近

平素なら火葬の臭気が僅かにても鼻を襲えば、

の臭も火葬の臭も別に気にとめず平然と、

其等の辺にて休息し水筒より水を飲み渇をいやす。

忽ち食気を損ずる習ひなるも此

非

常時

に は

#### 九日

容易の事ではないのである。未亡人は手拭で姉さんかぶり姿はスゲ笠芳子は海水麦ワラ帽子で兩人は未亡人を横浜駅まで送るとて同行す。此処から駅までは二里の距離であるから徒歩では 何れも脚半と足袋跣足である。 逗留中の山隈未亡人は東京の留守宅は女中のみで気にかかるとて今朝出立す。 余は海岸に出て此三人が巡礼姿に見えて感慨無量、其八幡橋の 婆やと芳子の

方面へ遠ざかり行くのを見送った。

かったが、山隈さんとお芳さんの兩人は平気で何時までも見て居たとて小言らしき話をしきり 夕方に兩人帰宅す。婆やの話に三人で正金銀行の外側の死屍を見た。自分は二目と見られな

終日家 水居す。 來訪者多し。 其内には日本カーボン社長近藤賢二氏、市会議長平沼亮三氏及左 にした。

右田喜

郎等あり。

十日雨

大山・小林兩書記と約束あり、共に文部省に行かんとて早朝家を出で八幡橋近くの莫大小会

社 一の付近まで行くと、学校より自転車の小使來り、 今日雨天であるから明日に見合わせては如

何との事なれば同意して帰宅す。

## 十一日

平常なれば今日は第二学期の始業日である。

が 越えて横浜駅に至る。東京行きの連中は駅に充満して居る。 無い 朝七時家を出で日本橋まで行く。大山・小林兩氏橋畔にて待ちつつあり。相伴って久保山を のであるから余の如き肥満ものは上から引き上げ下から押し上げて貰はなければ乗 無蓋 の貨物列車に乗るに、 ホ 車 が

困難であるから中々の苦労であった。

て休息し昼弁当を食す。サイダーあり、梨あり、西瓜あり丸で横浜と様子が違うので、全く極 JII 楽へでも來た感じがした。 しき日射に一 駅にて山 P っと九時五十分に発車した。 .手線に乗換え、池袋駅に着したのが午後二時過ぎであった。先ず駅頭の水菓子屋に 段の窮屈を感ず。東神奈川に至ると脱線事故が起り、一時間半立往生をした。 生來サイダーを嗜好しないのであるが、 立錐 の地なき立った侭で下に屈む余地なく上からは残暑の酷 今日は全く別人の如くサイ

ダーの美味を感じた。

其から徒歩で文部省の仮事務所へ行った。 仮事務所は大塚の高等師範学校であった。午後三

時であった。

次官や局長 |明後十三日には罹災の直轄学校長会議があるとの事で、東京との往復は不便極まるのであ を初め其他の人々に面会して、 横浜の様子を知らせ又先方の様子をも聞いた。

るから、十三日まで東京滞在と決した。

Ш ある為め食料品は比較にならぬ程豊富である様である。 り。 ひ一泊す。 上邸に避難して居た。 友人川上常郎氏は小石川植物園の側にあるので、高師より至極近きを以て夕方同氏の 此 処にて牛肉を始め色々な御馳走になる。 川上氏 /は宇摩郡長須村の人にして朝鮮平安北道知事を経て、当時東洋拓 横浜は丸焼けで東京はまだ可なりの焼け残りが 友人武川磐君は本郷の家を焼かれて当 殖 0 理 邸 事た を訪

+

菅沼 て数年間同僚たりしことあり。 朝 時 藏君を見舞う。 Щ 上 |氏邸にて弁当を作って貰ひ携へて出立す。小石川白山御殿町で第一高等学校教授 夫婦共在宅にて大に喜び祝杯を擧げてくれた。 其から程遠からぬ片山正夫君を見舞う。 菅沼君とは仙台第二高に 余と帝大理科の化学の

も所 東京高工校長手嶋先生の兩未亡人を見舞ひ、 同 り其処より下谷本所深川方面の火災地を瞰望す。 .級生であった。現東大教授である。此処にて昼飯を食す。其より仙台第二高校長中川 々煉瓦や鐵筋建造物は可なり建って居る。 本郷帝大の焼跡を見て、終に湯島 此から見ると地震の強さは横浜 眼 の届く限り焼野原となって居るが、 天神 の方が遙かに大 の 境 それで 内 先 に入 生及

なりしことを証

で飯 生等が今少し奉公の志があったなら、斯かる損害が減少せられたであろうと考えられる。 111 「隈芳枝さんの宅までたどり着き、久々にて入浴一泊 本 本 ·郷通りに出で磯田氏を訪ひ春日町まで行き、其処から電車で水道橋に至り、其処から徒歩 郷 田 |橋まで行き飯田橋から電車で若松町まで乗り若松町から徒歩で新宿を経て夕方代々木の (の帝大などは貴重な資料が保存せられしものなりしが、多くは焼失した。帝大の職 員学

#### =

入用が尠い。

車 にて高等 朝 西瓜 の 御 師 範の文部省事務所に行く。電車も汽車も無賃であるから、 馳走になり七時半に山隈さん宅を辞し前 日の途を辿り春日 東京へ來ても実に金 町に出で、 其 処

— 25 —

まだ時刻が早いから又川上氏邸に立ち寄り砂糖するめ片栗粉など貰い受け携へて文部省仮事

務所へ行く。

学校罹災の様子を陳述し仮校舎の急造と授業開始の一日も速かならんことを欲し此が横浜の銷 午前十時半より罹災学校代表者の会議を開く、 可なり多数の出席者あり、余は横浜の状況と

沈したる人気を回復する所以なることを説く。

豆一斤とを買う。途中は焼けない為め横浜と違い相当の物資を販賣し居れり。 正午過ぎ弁当を食し其侭辞して帰途に就く。池袋へ出る途中にて海苔の佃煮 缶 詰八個 と砂

横浜駅より此等の荷物を携帯して徒歩にて全く疲れ果てて午後六時頃帰宅す。

う。 いから当分宿泊すると喜ばれた。 を逸したるを遺憾とす。 横 荷物を分担してくれて大に助かった。喜一郎氏は一兩日前から余の宅に泊し宅は気持が良 :浜駅よりの途中中村橋付近にて地方より帰り來た一学生に遇う。梨数個をくれた。其姓名 又根岸橋を渡り暫くすると左右田喜一郎氏と棟一とが後より來るに会

棟一及武夫も來泊するので可なり賑やかである。

開く。 時 々大きな夕立が來て如何にも荒模様である。午後一時より職員会議を機械科職 此控室は僅か三間に四間位の獨立したる建物であるが、震災により壁に亀裂も生じない 工控室にて

位完全に又全く火災をも免れたるは実に不思議なる程である。

達 所を借り受くることを相談し、一同之に賛意を表せらる。 の方策を講じ度く、其れには先ず三年級の応化及電化は東神奈川の浦島町にある横浜舎密研 ?成し難き状況なるを以て、是非我等は協力一致して單獨にて本省の力を当分求めず授業開 会議は先ず余が文部省に於ける罹災学校会議の模様を述べ、本省より我高工の 救助 は迅速に 始

財界恐慌の為め失敗後、 所長として又冨山保氏は主任として化学工業に関する研究をなす処にして、大正九年増田 「密研究所は大正四年、余の建案により中村房次郎氏の経営にて創 原富太郎氏の出資経営にて今日に至れるものである。 始せるもの にして、 屋が 余は

十五日 雨天、風稍強く荒模様

風邪の気味にて臥床

十六日

発熱し臥床して夜半に至るまで眠られず。 奈川に赴き研究所にて冨山氏に面談 中村房次郎氏も來会するに際会し、同様了解を求めたり。其より市役所及県庁に行き更に東神 あるを以 風 猶未だ全快せざるも、 午前九時出立して三渓園に行き西郷健雄氏に面会して其了解を得たり。 前日職員会議の決議により研究所使用の件に就き承認を求むる用 Ų 研究所使用の用談を終え日暮れて帰宅す。 疲労甚しく 幸にして

復興の気分が何処となく湧き起りつつあるを見られ気分を強くするの感に堪えず。 五銭乃至十銭の安物が可なり道傍にて売られて居る。此等些細にして貧弱極まるものを見ても、 て見ると、大根や蕪などの野菜類を始め又食物としてはシルコ、スヰートン、スチュウ等一杯 今日市中を見物すると震災後、余程改善せられたるを見る。横浜駅より久保山一帯を通 行し

言して曰く 猶本夕七時学校へ桐生高等工業学校より使者数名來り白米三斗を見舞として贈らる、且つ伝

た。 鈴木高工校長は震災で重傷を負ったとの事であるので、取り敢えず西田校長の命で御見舞に來 災後二週間に及ぶも横浜から一切通信がない、ところが長崎の高等商業学校からの便 りでは

今回の様な大天災では種々な流言飛語があった。市中知名の人々の身上に就いても当時市内

れが 様で横浜高 り容易に校舎外に逸出せざる為に人々から心配せられたことが此等の風説を生む基となっ 東京にまで伝はり、 留せず旅行不在等であった人々には、大抵種々の噂が伝えられた。余の身上に就いても同 「工が焼け校長が焼死したとか圧死したとかの風説が弘明寺町の膝下にまで起って其 態々見舞に來て呉れた人もあった。 地震の当時 余は校舎内に踏 み留ま

# 十七日 晴天 秋日和

な事を回想 今日 は東京へ行き文部省へ出頭の筈なりしも風邪猶全快せざるを以て、終日床中にあり色々 した。

まだありありと記憶に新なるも、余りに大事変であったから又一方には夢の様にも感じる。 言から室内の混乱、 震災後既 に半ヶ月を経過した。 家屋 の動揺から室外に出でんとした努力から廊下の倒れかかった様子など あの当時教務室にて突然の大震に横地君の地震じゃという一

て無数の若き人々が火熱地獄に苦しみぬき、其果ては燃えて相重なりつつ死んだ。其他 茫然として見て只感慨無量であった。其時期即ち午後の七時前後には正金銀行の外郭や内部に の場所

学校からの帰途山上の英和女学校の校庭に立ち、眼下に全横浜が火の海と化したる凄状を只

想像だも致さず根岸の自宅に急いだのであった。 でも火の地 |獄の連続で二萬幾千人が市中だけで死んだのであっ たが、 自分は 阿等其 の様な事を

歯科 最早夏休 自 医が 分 0 歯疾の 東北 も終りに近づいたから九月一日より是非 地 )為め山下町の歯科医に就き、歯を若干抜き取り休み中に入歯をする筈だったが 方に旅行をして留守で、 篤と其帰浜の日を確実に知らぬ為め段々に延びたが

半数 たであろう。 古煉瓦石造で其二階に治療室があった。此山下町は煉瓦石造 暫く玉を突き正午食堂に行くことを例として居た。処が山下町の の住民が 科医に行かなければ夏休中は大抵午前十一時過ぎから本町の弁天橋畔の銀 又銀 死ん 行集会所に行って居ったなら同様の運命を逃れ得なかったであろう。 だ最も悲惨を極めた処であった。若し余が此処に行って居たなら必ず圧 山下町に行かねばならぬと思って居た の家屋が多く為めに全部 歯科医は岩崎という人で宅は 行集会所 崩 壊 に行き、 L て

最 後を見届け得たのであった。其れ 運 にも九月一 日の 此 大災難 がの日 に限 には次の様な事があった。 り、 此 の 兩所 の 何れにも行かず、 学校に居て其学校の

休んで居るから、 直 動 |轄学校では自動車をまだ殆ど所有して居らなかったが、横浜では一台欲しいと思っ 車 通 0 松浦という友人に話をしておいた。暫くして松浦博士から八月三十一 恪好の自動車があるから見に來いという知らせがあったので午前中中野町 日 は 祭 て其趣 日で の

同 氏 'の宅を訪ひ、其から長崎村に行き其車を見て約束をして帰った。

か 後多少の 此も不思 談義をした為 助 꽾 かったが、二階の食堂で食事準備中の者は圧死の最後を遂げた。 日 議 治療代支払の為め探索したが何事も知れなかった。銀行集会所でも早く走り出たもの に は な運命であった。岩崎医師の処では岩崎氏を始め助手看護婦全滅という有様 めに、 此 車 の 購入手続きの為めに学校で多少の手間を取り其から教務室で新内閣 余の平素の日常行事の 日程 に時刻 の差が生じた為めに一身の厄役を免れ 組 織 其 0

際まで其丸棒を歯でかじり遂に逸出して助かった。 運であったのが散髪屋の倉林で地下室で一本の丸棒で片手を圧せられ午後に至り火災の來

る間

ば書棚 余は実に危き運命の下に無事であることを得た。若し自宅に居たとしても、 の転覆で多少の負傷位はあったと思う。何れにしても幸運至極であった。

学校に出勤中であった為めに校舎の焼け初めから最後まで見届け、 其報告書まで実地の 仮出

來た事は、 何よりも満足至極で精神的に又大に得る処があっ た。

だ。こんな惨事は世界の歴史にも稀れな事であろう。 安全な場所を求 恐ろし い地震と火災の第一日は去った。 めて悲惨極まる地獄の苦をなめた。 何十万人という人々は追 而して数万の人は水の中で又陸 東京と横浜と横須賀で死んだ總人数は拾 11 來る猛火を避 つけ逃 0 上 で れ 死

書齋に居たなら

四五 日 清 、萬人であるとの噂である。又物資の損害は五十億円という、 露 0 兩戰争を合しても此一日又二日で消滅した人命と物資の損害に及ばぬ計算である。 或は百億と見積る人もあ

道 や社会改造論者は、 1) り、 徳的には全く無政府の感を起さしめる。同時に又忠君とか愛国とかいう説明も次第に難 金 極端 は自然 階級の人が他人の妻と情死しても恋愛至上を武器として之に同情もし、又弁護する世の |力萬能と世間の成金連中は近來どれだけ其弊を世道人心に惡影響を及ぼしたか、又一流 に 西洋風に又個人的に走りつつある。世界戰争後の我国の一種の平 日々に新聞紙上に顕れて來る姦夫や姦婦は何れも愛人という美しき名になった。 を征服すると云って近代の文明は人間をどれだけ高慢自負に流れしめたか 慥に我国民を外道に導きつつある様に思はれ此先き我国が 和 如何に成り行く 論や民主主義 知 れな

を唱へて居るのである 虚 一然大地震(大火災)により自然が一瞬の間に揮った鐵槌は忽ち東京と横浜との二大 である。 にした。 恐しき罰であると思う。財界其他に於いて畏敬せられる澁澤青湖翁も此頃天罰 人力が如何に微弱なものであるかを実に痛切に感ぜしめさした。 此が 所謂 天 都 市を の

かが案ぜられた。

ここで人間が高慢な鼻を折りて謙遜となり、 奢侈の惡風を矯めて質素となり、不徳より道徳

に不倫より人倫に転換すべき一大時機に会したとも云うべきであろう。

BH 多少にても此 の跡を見ると一種の昂奮を感ぜずに居られなかった。此の如き大事変に際し一点の失望落膽又 五日に横浜駅 一喪することなく、 取 此の様な考へが震災の当時より余の頭脳を全く支配して來た。其処で又一方横浜全市の荒廃 りわけ自分としては我高工を真っ先に復興せしめぬばならぬ。而して其覚悟を示すことが 際光明を市民に与えるものと考え、銀行も会社もまだ開業の一広告も無き去る十 馬車道と日本橋の三ヶ処に横浜高工は仮校舎を急造し成るべく速に授業開 一気復興再建に邁進することは国民の大覚悟でなければならぬと考えた。 始す

もあった。斯くして僅かでも市民に復興の勇気を与えたいのであった 此 には多少の決心を要するのであるが、同時に是非自分で努力して開校せしむると云う自信

しとの立て札

をし

当時 るものも可成り多いのである。震災三日目の夜から我々の家にても玄米の粥を食する様にした。 る凡てのものを焼き盡し一家全滅し全滅しなくも杖と柱と頼むものに死に別れ全く途方に暮れ 過 復興の勇気も在るものながら、震災の生んだ悲惨の事柄は述べるまでもない。有りとあらゆ 一度の歩行奔走と減食とは自分を可なり疲労せしめたから此十五日から人並に食事をするこ 他 .の悲惨なるものを目撃しては其さへ満腹して食するに忍びなかった。

とにし

嬉しかったことであると眼に涙を一杯にして居た学生もあった。又遠い処から難儀な長旅行を る様になった。中には学校の焼けた位は何でもない、校長先生が無難であったことは何よりも - て学校や校長を見舞に出て來てくれた人もあって人情の美しさに心から感激の情に打たれる 此頃から東京や他方から來る知人や学生は梨・野菜・菓子・牛肉等を持参して慰問してくれ

た者があるとて研究所から余の許に報告があった。 の手のなき処を研究所出入りの者を欺きて其荷物を埠頭まで運ばし妻子を船に乗せ郷里に帰っ 防禦もせず研究所の物品が盗まれんとしても一向に之を顧みず、自分の所持品をかき集め人足 研究所の一所員が研究所の一部が焼け、正に他の部分へ燃え移らんとして居るのを傍観して

こともあった。しかし又他方には反対の事もないこともない。

此 も別に惡人ではなかろうが人間の世の中は千差萬別である。

十八日

本日猶不快につき休養す。

## 十九日

被害等を調査し、更に東神奈川の研究所まで行き此処にて別る。 Ш [書記を加へ三人にて関東学院を初め市内の建築物の被害の状況並に横浜港内に於ける倉庫の 午前学校へ行く。十一時頃本省建築課長柴垣氏來校し、学校の被害程度を檢分す。其より大

たり。 神奈川より大山氏と徒歩にて久保山を過ぎ道傍に休息し大山氏と一杯五銭のスヰートンを食し 子安より京浜電車が通じ居り神奈川まで乗車す。久し振りの電車にて実に気持ちよかりき。 夕七時頃漸く帰宅す。

## 二十日

庁は桜木町駅付近にあるので約一里半程の里程である。毎日跣足袋に竹の杖をつき其等の間を (1 トと流れ落つるが、それ位の事は全く平気になった。 往復した。又必ず握り飯二個と茶を入れた魔法瓶を携帯した。 此 「頃になると萬事不自由や労苦にも慣れて來たので、三里や五里の歩行も別段苦労と思はな 宅から学校までは約一里横浜駅へは一里半、東神奈川の研究所までは二里半、 暑い日中には額から汗がボトボ 市役所や県

食物の不自由は更にない。只品質が下落した位である。

震災の前日に米屋から白米二斗を届

々にも分配しながら又大家内でありながら米には全く心配がない様になった を取寄せて置い けてあったが、 た。 猶不安を感じたので三日の日に懇意な加籐という学校付近の農家から玄米二斗 其からは青年団から配給を受けるので今は壱石二斗位になった。

られ 寸 校にフォ は板囲 砂 糖 も赤砂 ひをして分配品の運搬に使用した為め、 1 F の自 糖と合わせて二貫目位を持ち合わせたので平素の四、 動車が焼けずに残った。 車体が なか 非常に利便を得たので青年団から大に感 ったが之を芝生の青年団 五倍位 豊 富 一に貸 にな した っ た。 青年 せ

は .梅干は必要のものであるとて、死んだいよ子は毎年梅干を若干づつ製造して居っ 又宅には梅干が二斗位貯藏して居った。 梅干は古いものが善良である。何か一 朝事あるとき た

立 っ 正 た。 月 0 此二件 餅も注文せずに宅で搗けとて臼や杵も備えて居ったが、 は今回 の事変でいよ子に感 謝せずに居られ なか っ た。 其器具は今度は米つきに役に

庭上に振り出された。宅の者が見付けて再び池中に入れたが災日の夜中に泉水のセメントが が 居った。 ム 事 t 変以 事で生きて居る。 來最早三週間を経過 毎 朝 余が池辺に立つと餌の催促をして集まり來ったものであったが、 只哀れを止めたのが金魚のみであった。 した。 家内 一同は 何も不自由 な しに 衣 庭の 食 した。 泉水 に百数 鶏もカ 地 十匹 ナリ 震で過 P の 半は 金 ŧ

### 二十一日

橋から大塚行の電車もあるので、安々と大塚の高等師範の文部省の仮事務所まで行けた。 東京へ行く。 最早汽車も東京駅まで開通して、其上二等車まであった。東京駅の裏手の ) 呉服 同

にて實業局長に面会すると意外千萬な事を言達せられた。

うのである。其処で文部省では我横浜高工を名古屋へ一時移転せしむる事に決した模様である。 で名古屋市と愛知県庁から、 名古屋 市に陸軍幼年学校があったが、 それぞれ理事者が上京して罹災の直轄学校の一つを引受けるとい 前年廃校となり其校舎は其侭不用になって居る。 それ

それは意外千萬の事であるとて承諾を與えなかった。然らば文部次官まで來れとて、局長に

れて次官に面会した。次官は横浜は震災の被害特に甚しい、罹災民の住宅は最も急を要す。

学校の仮校舎など後廻しにすべきである。学校はひとまづ名古屋に移転すべしと切 流論す。

は

たりとも他所 余は 非常の此際名古屋移転は或は御尤の次第なりと考えるも、 如何なる困難にも忍耐するから是非横浜に踏み留まりたき旨を陳述す。 に避難する事となれば、一面に横浜市には不利又他 今横浜唯一 面には市民に精神的打撃とも の直 轄学校が 一時

次官 聴 き入れず帰って考えて見ろという。 余慨然として去る。

護して居る身分で、 余は学校創 立の任に当り、 朝天災の為め市が全滅したりとは云へ、其復興の大任は自然と我 同時に横浜市の為 めに微力を盡して來た。 横浜の一角に工業を守

りかかる気分に燃えざるを得ない

振 などは憐むべき人間の屑であると憤慨せざるを得ない。 に見ゆるを得んやである。 よし名古屋へ行き無事に其職責を果したりとして幾年の後 り棄てて上司 此 の大天災を体験しながら又市民 の命令なりとて、 男子の気節も教育の信念もあったものではない。文部省 悠 の 々と職員と学生を引き連れ名古屋に 四苦八苦を眼前に見ながら、 何 の 面目あって再び横浜 仮令冷然でなくとも、 行けるものである に帰 の行政官吏 り市民 之を か。

愈々強制命令が下れば辞職の外なしと覚悟を定めた。

店 経 て若 頭 文部 にあった鐵砲ずしと餅のない汁粉一杯を食して夕食代りにした。 つく様な雨になり徒歩も困難な程で全く濡れねづみの様になった。 松 省 を去 町で下 つ 車 た Ĺ の た。 が午後四時二十分であった。 其から先は 電車が不通であるから徒歩による外ない。 雨がバ ラバ ラと降り出 路傍の した。 小屋に休息 新 電 宿 車 で水道 近くに來る 橋を

雨

も小降りになったので又歩行を始めて午後六時半代々木山谷の親類山隈芳枝未亡人の宅に

#### 二十二日

妻いよ子の命日じゃ、 朝起きて見ると雨が猶降り続いて居る。 大正七年から月の二十二日には家内の誰 朝食後、 握り飯を貰って七時に出立した。 かがお寺参りをした。 今日 今月 は市 は亡

訪問 深井英五氏の邸を訪問した。さいわい深井氏は在宅であったので面会して先刻井上大藏大臣を の寺々は皆焼けた。 けば妻君は圧死したとの事で、 下よりも大臣に微意のある処を御願下され御力添えを願いたいとの事を云々した。 までの間 ら如何 ると廣瀬 も会談して、其れから赤坂溜池 時 した、其 頃麻 せ の家 んと思案して居ると、玄関子が來て只今長引く來客中であるから十二時半から に日本銀行まで來れとの事であった。依って此処より遠くない氷川 布三河台の大藏大臣井上準之助氏邸を訪問 、用件は罹災の横浜高工復興予算の成立に大臣の了解を得る為めであった。 が焼けて其跡に焼けトタンの 留守の者もお寺参りの事を思い浮かべて居るならんと想像した 悲惨極まる状に実に気の毒な思をした。 の廣瀬新氏を訪問 小屋を作り降りしきる雨の中 した。 した。 廣瀬はいよ子の従弟である。 跣足袋で訪問 に悄然として居る。 した。 町の日本銀 案内せられた 行 時 一時半 間 何卒貴 って見 半 聞 程

き理 営業であるから尠からず混雑して居る。此処で握り飯の昼食をした。 それから虎の門に出で電車で日比谷に下車した。 事 JII 上常郎氏其他に面会し正午頃日本銀行へ行った。 公園の避難民の状を見て東洋拓 日本銀行も焼けて居るので其焼跡 殖会社 に行

の返事であった事が判明した。且つ二時半から枢密院会議へ出席するから、今一度出直して來 を立てると大臣は最近まで日本銀行総裁であった為めツイ大藏大臣官邸を日本銀行と間違えて て東京駅まで來た。駅前の丸ビルにて多少の食糧品を購ひ夕方帰宅した。 てくれとの事で致方なく日本銀行を辞去した。 午後二時になっても井上大臣の顔が見えない。出勤をして居る深井理事に頼んで大臣に伺ひ 門前で行員の友人佐々木多門君に出会い相携へ

正午頃より雨止む。

#### 二十三日

に賛意を表す。

坂孝氏に面会し、 屋 根 屋が 來て瓦の葺き直しをする。学校へ行き午後は市役所へ 昨日文部次官の余に提出したる内旨を告げ、 且つ余の決心を語る。 、行く。 商業会議所 に 井坂氏大 て会頭 井

#### 一十四日

朝雨中を本牧三渓園に原富太郎氏を訪問す。

原氏は今度出來た横浜復興会の会長である。

:は高工が本市に於て是非復興すべきである趣旨に付き諒解運動である。

原氏は素より大

賛成である。

午後学校に行き職員会議を開き、 文部次官の内旨を伝え余の決心を陳述す。 一同同意す。

(雨止まず全身濡れて夕方帰宅。夜に入り雨猶止まず。

前日の屋根修理は奥の六疊二間のみにて他は未だ落成せず。其二間には佐倉の聨隊兵が九名 風

でも他所の不完全なる急造バラックに比し如何に有難きかを感ぜざるを得なかっ 宿舎し其処は 雨漏れなきも、他処は何れも雨漏れ甚しく夜中寝所を移すなど迷惑したり。 た。

今日初めて 郵便物の配達を受けたり。 葉書三本にて何れも震災の見舞状にて、 内一本は九月

二日発信のものであった。

#### 二十五日

午前十一時より職員会議を開き、授業開始の諸準備の相談をする。

ば市会に提案して移転反対を議決して本省に陳情せん」と。 日く「若し本省が強行に移転を命令せば如何」と、余日く「辞職あるのみ」と。 午後市役所に行き市長渡辺勝三郎氏に面会し、高工復興に付き文部省の意向を開陳す。市長 市長は

ず。 本日午後東京日日の岡實博士及渡辺銕藏博士の兩氏見舞の為め学校へ來る。不在にて面会せ

を感ぜしむ。 夕方市役所を去る。 中秋の明月皎々として焦土の市を照らし、 徒歩にて帰る。余に物の哀れ

今日郷里伊豫よりの初めての書信に接す。九月二日の発信。

二十六日

午前学校、午後市役所。

坂孝・市会議長平沼亮三。 文部大臣へ提出の高工名古屋市へ移転の反対陳情書には市長渡辺勝三郎・商業会議所会長井 復興会長原富太郎 の四氏連署す。

本日熊本高橋町田中ツル子より初めて書信來る。

#### 二十七日

本日東京へ行き文部省にて前日の上申書を粟谷局長へ提出し、大臣へ伝達を願う。且つ付言

す。

私は震災にて危うく命拾ひをしました。高工が名古屋へ移転するなら市民から竹槍でやら

れる筈でした。折角命拾ひをしたのですから竹槍は御免です。」と。 日暮れて家に帰る。左右田棟一氏の一家七人鵠沼より帰り、根岸海岸の当宅の付近に借家し

て一先づ落ち付く。

#### 二十八日

学校にて職員会議を開き、名古屋問題他を報告し且つ今後の対策を評議す。

#### 二十九日

の状況などを視察しつつ市役所へ行く。 快晴にして秋涼の気壮快なり。裏手の山を登り根岸競馬場より市内に出て関内の諸銀行開業

市長は明三十日の市会へ高工の名古屋移転不可の議を提出し、且つ決議するとの事。

際 長に建言し、 余は更に横浜は孤立せず情報員を絶えず東京へ派出し東京の状勢を詳にして置くこと、又此 宮殿下の 更に神奈川町に行き、貿易新聞社長三宅氏を其私宅に訪ひ右の兩件を謀る。 御一方なり御二方なりの御邸宅を当市に置かるる様、 宮内省 へ歎願するの件 同氏 を

大に余の意見に賛同す。

其より県立工業学校へ行き、秋山校長に面会す。 其校舎の幾分を借り入れ度き希望の処、 震

災の損害程度無数、到底使用に能はずと断ず。

其より大和 鉛筆会社、 研究所、 日本カーボン会社をも訪ね、 夕方帰 宅。

等を施し約千五百円を要したり。 今日にて屋根 の修繕を終る。 最早 雨降りても大丈夫となる。 傾きたるを直し多少のハスカイ

#### 三十日

青年団へ貸したる自動車学校へ引き取る。

一來なか 横 正 午 浜 港 過 ったので、 ぎ より船 廣 田 にて 神戸 船中にて横浜高工は全滅し鈴木校長は気の毒にも圧死したと云う人が二人 神戸に帰任す。 高等工業学校長來訪あ 氏は裁 判所 り、 廣田氏 の焼跡にて一夜を明か は茅 ケ崎 の 別邸 したが高工を見舞う事 にて地 震に逢 い 九月 が 四

出 日

まであったので非常に心配して神戸に上陸して早速他所へ問合せ校長の無事であったことを知 事を物語 りせられ

余は 午後二時より復興会の 總務委員となる。 初顔合せあり本町焼跡のバラックにて集会し、 原富太郎氏の挨拶あり

.日横浜市会が開会せられ横浜高工の名古屋へ避難することの不可を決議す。名古屋行も段

我横 々と其声が大きくなり終に市会の問題とまでなりたり。 震災も最早一ヶ月を経過した。 浜 市 の錚々たる人々である。併しお互いに顔を合して其服装を見れば惨たるものである。 今日復興会に出席した者は百名近くあったであろう。 何 れも

富豪も一日にして家を失ひ衣類家具を焼かれ、店を焼かれ、会社銀行を焼かれ 逃れた者は先ず仕合せの方で親や妻や子供を失ひ途方に暮れる者も数限りない程である。今日 汚れたる背広、キャハン、跣足袋、 では横浜の人々は先ず乞食同様と見らるべきである。 襦袢の上から直ぐ外套など種 々様々十人十色の状態である 僅かに身を以て

居る。 其行 も中 列 ·村町を通行すると全国各地から來た慰問品分配を受取る為め長い長い行列を作 は老幼とも女が多いが中には若い男子も交って居るのが見受けられ って

余の宅にても毎日何か多少の慰問品を貰うのである。 行列の後に続いて貰ったことはないが、

青年団から態々届けてくれるのである。

今日 0 慰問品であった。 二三日前にイリ豆二合程木綿袋に入れたものが届いた。 は 又新 しい 綿ネルと縞 余の故郷を去る僅か数里の近傍の人であるから特に嬉しい感じがあった。 の袷が來たので婆やと芳子が貰った。 香川県三豊郡笠田 村高橋磯吉氏から

ない、それでも青年団は罹災民として色々な慰問品を運んで來る。 余等 芝生では地 Ó 所在 地 一震成金が出來ないとも限らない 根 岸の芝生は火災に遇はないので一番有難 15 場所じ 而し や、 てそれを適当に分 実際に慰問品の 必 一要が 配

のは 高 裁 の有様は一 工 震災一ヶ月は 八戸であった もなかった事は自分ながらも不思議に感ぜられる程の幸運であった。 は 所 小使を合せて丁度六十家族が の六十人其他税関、 生何として忘れられよう。此の恐怖の日に官庁にて死者の筆 夢の様に過ぎ去った。九月一日と二日との恐怖すべきあの凄い空の模様や 県庁、 市役所、 あり一 家四人とすれば二百四十人の人数になるが 銀行、 会社何れも多数の死傷者を出して居るも、 頭は郵便局 併し焼き出された の百七十人 一人の 地 我 死

りの材木やトタンを集めて雨露を凌ぐ小屋を作った者も尠からずであった。一ヶ月前の当時 家を焼かれた人々の多数は縁故を辿りて地方に散じた者が多い様である。 残った者は 焼 け残

居る。 ある様に見える。 を超過したり、 である。 印象はまだ生々しく二人集まっても三人集まっても災難の物語りは、 一家全滅に近かった人も自分の不幸を笑って物語って居る。泣きつつ物語る人は実際 泣いて不幸を告ぐる人は此一ヶ月間に二人の婦人があったのみである。 共同の災禍に出会したものは單獨に遭遇した悲哀とは人間感情の異なるものが 何時までもくり返されて 或悲哀 0 程度

(本日誌は紙片に記録し置きしものを此冊子に再録したり、後日に保存せんが為めなり。

# 附記

横浜 は僅か二十数年の間に二度全市潰滅した。其都度余は親しく其惨禍と其経過を目撃した。

兩度とも余の邸宅は罹災を免れたことは非常なる幸運と云はなければならない。

海と化し目も当てられぬ惨状を呈せしめた。家屋の構造と種類を問はず被害は一般であった。 震災は予期せざる瞬間に起り倒潰家屋のありし各所に火災を生じ、数時間にして全市を火の

変化 影響に於ては、 直 接 戦災は多少震災と其趣を異にせり。一ヶ年に近き空襲は市の一 なき為め、 年五月二十九日の大空襲は市の大部分を焼き拂い に爆撃を蒙らざるものは其災禍を免れたり。 其兩者に於て非常に差異ありと云はざるべからず、少くとも余に於て然りであ 震災よりも程度の深刻なるものなしと云うべきであった。 猶傾 たり。 斜したる家屋もなく地 然 れども不燃性 部を幾回にも渉り破壊 蓋し人心に及ぼす 面 0 大 0 亀 建 築物 裂や水準 たり。

る。

が 力 横浜人士も震災当時は何れも志気旺盛で張り切って居った。 ありたる会心 大正 崩 の儀 杯活動した。 れ て來 礼まで簡 年 九月一 の期間であった。 馬 前途に光明を認め自信を以て活躍した。今から考へても其当時は懐か 素質 鹿 日より翌年 正 實の 直 に 頑張 申 し合わせまでして勇往邁進した。 焦土の中から横浜復興の青年が輩出するならんと希望に に至る一ヶ年間 つ た のが我輩 人であっ は 余の生涯に於て、 たの 横浜復興まではと衣服を始 か 併 も知 し れ 最も努力し又最 年ならずして段々と士 な (1 も働 め冠 き甲斐 燃えて い。

な 空襲に 空襲 は初 味 の始まった頃から勝利の見込みは少なく、 方の空軍は如何ともすることが出來ない。 め から何等の希望も光明もなかった。 敵機 当局は一億一心とか何とか色々な宣伝 陸上の高射砲は は 自 由に帝都や浜の空を飛 射撃はするが更に んで爆 弾を

語を以て戰意昂揚や生産増加の方を講じたが、何としても国民は意気消沈して反響が か つ た。

身隊 る。官公吏を初め警官まで闇の商人と結託して惡事を働く状勢は、 軍 大 1 属により其他 和 八 八月十五 に大なる拍車を加えた。忠勇なる武人さへ其有様であったから餘人は押して知るべしであ の復員したる者さへ盗賊と化するに至った。 魂 は消えてなくなっ 日 の 一の人により勝手に隠匿せられ全く火事盗人となった。 終戦と共 た。 に全く異なりたる日本と化した。 軍 部の貯藏物資は食糧、 此等隠匿物は幾百億円又千億を超 衣料、 忠君愛国は 金属品、 所謂百鬼夜行其ままで全く 時 ガ 何 処へ 日が ソリン等 経過す か去 は 7 るに てし 軍 へ、インフ 人に 従 ま ょ 7 挺 た。

た 事に今更の に て回 様に目 顧 すれ ば を醒さざるを得な (敗戦 0 跡を) 国民 の教養の低調なりしことと国家が苦労を知らな か 0

無

政

府の

状態を呈し、

政府又如何ともする能はざる態となった。

余 0 如 きは 戰 時 中 は止むに止まれず隠遁の身を再び起して、 東奔西走して士気鼓舞に努め必

勝

懇談会を設立して百数十回の

講演をした。

た。 併 其れが為 し今にして考へて見ても聴衆を欺いたと云う感じがない。 め必勝懇談会が発行した印刷物などは当局の忌避に触れたことがあっ 總ての講 演は全く良心的 た。 に行っ

新聞への投稿は没書の厄に遭った。 それにしても戦争に敗れ国民に最大の迷惑、 苦労、 困窮、

得るやとさへ思は 恐怖を与えたということを想起すると、 れる。 実に自責の感に堪えない。 何を以て県民や市民に対

界を相手として十年近き長期戦争に耐えた。敗れたりと雖も又以て慰むべきものがある。 條其他 建に一 ないが故郷へ帰るのは恥を裹んで帰る思いがする。何の顔あってか父老に見えんやである。 明 月 治 . 日が経過すれば自然と自責の感が薄らぐかと思ふと左様ではない。久しく郷里にも帰省し 段の努力をすべきである。 の為政者にのみ責任を帰せしむるのは卑怯千萬であろう。 大帝と忠勇無比の先輩志士に依って建設せられたる大日本帝国は根底から覆された。 世界に未知の一島国から起り、 八十年間に一大強 我々も責任を負担して国 国となり世 東 再

は必ずしも暗黒 であり苦労を知らなかった国家であったと云う自覚に眞に後悔の発憤をなし得ば、 あっても立身出世の途がある。則ち文化国として列強に伍する途がある。教養に欠けたる国民 軍 備なき国は仮令獨立を得ても真実の獨立国ではなかろう。 ではない であろう。 一種の不具国家である。 国家 の前途 不具で

を詳にしたるものである。 左記五三 言長 (詩は 昭 '和二十二年正月徳富蘇峰先生が余に贈示せられたるものにて敗戰後 0

世態

丁亥歳首有感

**倉皇銭厄歳** 

庸人秉枢鈞

産業日衰退

荒怠貪賃銀 国体喪尊厳 更迎最厄辰

上下紊君臣

世局滄桑際

幣鈔如落葉 拳国半暴民

嘯集逞強請

掃風俗淳 苛政猛於虎

與誰談経綸

浩嘆又浩嘆 滅絶恒産人 邪説敷海内 物價衝蒼旻

匡済無俊傑 神州化荊榛

十数年にして震災逢難記事を閱讀し今回の戰災と対照し有感以上を付記す。

昭和二十三年四月神武天皇祭日

- 51 -

候。 早速に当方の消息を申し上げ御同情に御答へ致すべき筈之處、 陳者九月一日の大震及大火の慘害に付き御懇切なる御慰問を忝ふし難有厚く御のぬれば 爾來公私復興の事務 礼申上 に忙殺

せられ心ならず今日まで御疎音いたし無礼御寛容被下度候

横 の 查 科 0 浜 他 たし 死傷も無く、 によれ 。 の 一 震災 市 に於て一 は 部を残 の当日 目下市民の意気精神頗 殆ど全滅と申 ば本校職員は家族數六十にて学生は三百六十人、卒業生九十五人、 同 朝にして多數の友人知己を失ひしこと実に痛恨 し全部焼失いたし候。 時 は恰も小生出勤執務中にて、 横浜 に化学実験室の二ヶ處より失火いたし、 所在の官公庁として珍らしき好運に御座候。 して差支無之候。 る 旺盛 私宅は損害微少にて家族又一同全く無事にて候。 御 而して此の灰燼焦土の中 座候 地震の為め壁土塗れに相成り、 大正九年三月落成の新校舎は機 無量 一に御 御安神被下度候。 より偉大なる横浜市を建設 座候。 幸うじて校舎を脱 物質上よりすれ 此等が 何れ 併し当地 其 も一人 後 械 0 I. Z 調 学 出

商 I 猶 小 実習学校は今日より県立第一中学校に於て、又横浜工業専修学校(夜学)も今日より高工 生 関係 の学校としては横浜高等工業学校は応急の仮校舎を設け、 來る十一月 一日より、

に

仮 校校 合に て夫 ヤ 授業開始の予定にて着 マ進 一排中 に 御 座 候。 先づ は 御礼旁々震災近況御 報 道 申

上げ候。

大正十二年十月十八日

敬具

鈴木

達治

右 0 書簡は学校の授業再開に際し、 各関係の方々に出されたと思はれる謄写版印刷のもので、

記

録

誌中にはさまっていたものです。

堂が そして此 又帰って來ても市民に対して顔向けできないと考えた煙洲先生のご意見でバラックでは は焼 和十 が震災後二ヶ月で授業再開にこぎつけたという事実には文部省も非常に驚いたであらうと思う。 部 大正 年十 新築され Ŧ. 失した。 (機 末 年 の雨が漏り月の光が射すバラックの教室から幾多の優れた人材が日本の工業界に巣立 私 期から昭 月名 応 0 此 た 入学した頃 教自 電) の の 様 は 和 が 昭和十七年 然 初 な事を考えると、果して名古屋移転していたら何年後に横浜 頭 碑 昭 の はまだ建築科と講堂は か 和 十年 煙 経済的不況もあり、 洲 九月私達 末頃であったが、その後又一 先生退官記念事業として建立され の繰上卒業の直前であっ 横浜高 震災後建てた仮校舎 工の本校舎の建設は非常に遅 時中 た。 た頃であっ 断され、 (バラック) 併 し間もなく 更に たと思 本 であ に 館 れ、 此 帰 は 完 れ の つ れ 成 あった 新 は 本 た た る。 か、 館 講 昭 堂 講 昭 和 0

## (村松四郎)

# あとがき

いろとお借りした資料の中に一册の古い和綴じの記録誌があった。 『和六十一年に煙洲会五百回記念誌「自由の翼」を出版する際に、煙洲先生のお宅からいろ

に反対して、 煙洲先生の不屈の横浜復興精神を、 煙洲先生ご自身の筆になる日誌によって知る

正十二年九月一日の大震災の状況と、其の後の横浜高等工業学校の名古屋移転の文部省の内示

には関東大震災逢難記事とあったので、今はもう知っている人も少い七十年近く前の大

表紙

事が出來た。

と共に、大正九年創立後間もなく逢難した横浜高工の危機に対する先人のご努力を皆さんに知 って頂こうと考えました。 今回此の日誌を刊行して、大震火災の恐怖と其れに対する物心両面の用意とを認識して頂く

今後若い方々にもお読み願うので、送り仮名その他に就て多少私の独断で字句修正をさせて

頂きましたが、度量衡の單位等でも判り難い所があるかも知れません。

尚文中左右 『田棟一とある方は、煙洲先生のご実弟で、東京大学ご卒業後、左右田家 (左右田

銀行経営者)に乞われてご養子に入られた方です。

〔洲先生は明治四年九月十一日愛媛県に生まれ本名鈴木達治(雅号煙洲)。

て化学専攻、副科として独逸語並に植物生理組織学を兼修して卒業。此の間優等生として授業 明治十九年より四年間、同志社英学校、その後二十三年より三年間、同志社理科大学部に於

料を免除されている。 明治二十八年一月より熊本の第五高等学校にて二年半教鞭をとり、明治三十年七月東京帝国

の第二高等学校及び仙台医専の教授を兼務。 大学理科大学化学科入学、三十三年七月卒業後同大学予科講師を勤め、三十四年二月より仙台

電気化学工業研究の為、独英米に留学。 三十八年八月より広島高等師範教授、四十一年六月より東京高等工業学校教授として二年余

四十四年五月帰朝後同校教授。

任命されている。

大正六年十月、 第九高等工業学校創立委員を嘱託され、 同九年 一月に横浜高等工業学校長に

(即ち横浜高工は全国で九番目に創立された高工ということです)

此 0 間 に大 正二年四月より十月まで休職して、 西欧 に出張 空中窒素固定法導 入目 的 又

大正八年十月より十二月末まで支那方面に出張されている。

大正十 ·年二月、県立商工実習校長事務取扱を嘱託

以て仮校舎を建築し十一月一日より授業再開 大正十二年九月関東大震災に逢遇した。此の時に文部省の名古屋移転命令に従はず、 大正十一年八月横浜市立大岡工業補習学校長事務取扱を嘱託さる。 した。 此 の頃 の校長始め各教職員及び学生達

自力を

の非

昭和十年二月 横浜高等工業学校長辞職

常な努力は

横浜

市民にも大きな感銘を与えたに違い

な

先生は五十歳で校長になられ六十五歳で自ら後任校長を推薦 して辞 職され た。)

必勝 られたことが とわりして、六ツ川 へんご不自由 辞 窓談会を組織し七十五歳の身で各処に講演 職 は政界或は市長に或は 先 な時 生 が続い 0 日記 の Ш た。 にも記されている。 の上から卒業生の活躍を楽しみに余生を送られ 此の頃、 同志社大学の總 全国の卒業生各位から煙草とか食料が先生のお宅 して歩かれたが、 長にといろいろのご依頼 戦後は たが、 があ インフレで生活 っ 太平 たが 洋戦 總 は 争 て 届 たい 中は

煙

洲

気会は昭

和

- 十四年六月に川崎大師八百吉に於て当時東芝に居られた菅要助さんを始めとす

る皆様方により始められたが、煙洲先生は此の会に出席するのを最大の楽しみにして居られ、 「ワシは煙洲会のオカゲで長生きできた」と常にお話されていたが、昭和三十六年八月二十九

H 九十歳でお亡くなりになられた。

生を知らない年代の卒業生の方の出席も多い。 煙洲会は先生亡き後も毎月続けられて近く六百回に達しようとしている。最近は直接煙洲先 仲々楽しくやってますので出席ご希望の方はご

いです。 終りに私なりに巻末にあった徳富蘇峰先生の詩を読んでみました。誤りを御指導頂ければ幸 連絡下さい。

倉皇として厄歳を銭が食り 可多島首有恩 あく 丁亥歳首有感

更に最厄の辰を迎う

庸人枢鈞を乗り 世局は滄桑の際

上下君臣紊る 国体尊厳を喪い

> (庸人 (滄桑 平凡の人) 桑田変じて滄海となる。世の移り変わりの激しい事) (枢鈞 鈞枢 要職・大臣

産業日に衰退し た怠賃金を貪る 幣鈔落葉の如く

物価蒼旻を衝く

嘯集して強請を逞くし たくまし

国を挙げて半ば暴民

風俗の淳を一掃す 邪説海内に敷き

苛政虎よりも猛なり

礼記の一節)

恒産の人滅絶す

神州は荊榛と化す 匡済するに俊傑無く

誰と與に経綸を談ぜん 浩嘆又浩嘆

> (幣鈔 紙幣のこと)

( 蒼 旻 蒼は春の青空

旻は秋の青空)

のべる、ひろげる)

敷く

いばらとはしばみ 雑木林のこと)

(荊榛

(昭和十七年九月電気化学科卒 村松

四郎)

関東大震火災逢難記事大正十二年九月一日

著者 鈴木 達治

平成四年九月二十日印刷発行

発行者 煙 洲 会

(世話役幹事 村松四郎)

電話 〇三(三五三一)五六三五東京都江東区豊洲四の六の二十二五

印刷所 株式会社白橋印刷所